

## 萬祝（まいわい）

愛媛県伊予郡砥部町 丸山 梓

母の生まれは、瀬戸内の港町である。女学校は港町の近くに、明治四十三年に創設されたという師範学校女子部に入った。祖母の肝煎りだったという。

祖母は嫁いでくるとすぐに、夫とともに漁場りょうばに出た。夫婦船めおとがねといえは聞こえはいいのだが、そのつらさや厳しさが身にしみていたのだろう。夏場は早朝五時、冬場は六時に港を出た。

女学校では、今の大可賀公園おおかがあたりから向かいにある興居島ごこしままでの遠泳があった。将来教師になって、子供を教えるための正課授業で、片道二キロ、往復四キロである。伝馬船に乗った教官がついていたが、かなりきついものだったという。

母は、泳ぎには自信があった。近場での蛸壺漁の時などは、子供のころから持ち船に乗せてもらっていた。船べりから突き落とされて、泳ぎを覚えた。祖母は母が泣きながら浮き沈みするのを、笑って見ていたという。

私が子供のころは、夏休みになると、母の実家に出かけた。数分も歩くと、遠浅の海が広がっていて、毎日のようにいとこたちと泳いだ。年長のいとこが浜辺で寝そべって、わたしたちいところ泳ぐのを眺めているのだが、一応監視役のつもりらしかった。

家に帰ると、縁台に腰掛けて酒を飲んでいた祖父が、今日はど

こまで泳いだと、大声で聞いてくる。祖父は漁をする時の山当てが、頭に入っている。山当ては、誰にも教えない。岬の鼻先と、対岸にある何本目の松の木を結んだところが漁場だったりする。それは時季によって変わった。

私が黙っていると、中学を出てすでに漁師になっている、年かさのいとこがからかった。「おじくそ」だという。「おじくそ」とは、ふるさとの言葉で、いくじなしという意味だった。私はもう小学六年になっていたが、そのいとこのいうように、腰くらの深さまで海に入ると、そこから波打ち際まで泳いでいたからである。

祖父は私の年ごろには、頭に着物をくくりつけて、興居島まで泳ぎ切ったものだという。島には漁師仲間もいたが、好きな女の子もいた。そばで聞いていた母が笑った。好きな子とは、祖母のことらしい。

母の旧姓は、「北風きたかぜ」といった。変わった姓だが、今もこのあたりには数軒残っている。幕末の兵庫津ひょうごのつで北前船きたまえふねを何隻も持った北風莊右衛門そうえもんという豪商の末流だという。母は幼いころからそのように聞かされていた。兵庫津は今の神戸港だが、どうせ分家筋のそのまた分かれだろうといっていた。

この小さな港町に残っている北風一族は、瀬戸内の塩田でとれた塩を運ぶ、塩回船しおかいせんに乗っていたらしい。もともとの住まいは、兵庫の尼崎あまがさきだった。

塩田が少なくなってくると、尼崎にいた一族の多くが見切りをつけ、紀州の漁師と一緒に房州銚子に漁場を求めて、旅網たびあみに出た。出稼ぎ漁である。紀州の仲間には、太地たいじのクジラ取りもいた。

船団を組み、伊豆半島近海で時々漁をしながら、風待港かぜまちみなとで空模様を見計らい、銚子沖に出た。三陸海岸から銚子沖にかけては、千島海流の親潮と、日本海流の黒潮がぶつかるところで、潮目しほめには豊富な魚がいる。

まかせ網という新しい漁法だった。一種の巻き網で、一統いっとう二隻で三統、合計六隻で沖合いに網を入れて曳く。漁夫は、八十人あまり。これで、大量にイワシを獲った。昔は鷹揚たかじょうだったようので、地付きじつきの漁師たちも、漁場を荒らされるといふ意識はなかった。そのうち、銚子の漁師たちも、まかせ網漁を取り入れるようになった。

祖父は尋常小学校の高等科を出ると、北風の親戚の持ち船に乗っていたが、そのうち世話する人がいて、トロール漁船の「炊き」として船に乗った。十七歳だった。鹿児島沖や、長崎沿海まで出漁する船団の、飯炊きである。見習いはみんなそうだった。

祖父は、とにかく屈託のない人物で、豪快な人だった。八幡浜やわたはまのトロール漁船に乗っていた時分、網がスクリューに巻き付くと、飛び込めといわれた。網をすぼめてトビウオが飛びはじめると、また飛びこめといわれた。飯のおかずは、ほとんどが刺身だ。そのほうが、手っ取り早い。小骨は多いがトビウオのうまいのは、漁師ならみんな知っていた。

漁労長も、やはり「炊き」からたたき上げた人だったが、彼が子供のころの若いモンは、度胸試しに、打瀬船うたせぶねでアメリカに密航をくわだてる者が多かったという。打瀬船は長さわずか三丈、十メートルばかりの帆船である。土佐まで行くと、それで太平洋を

渡る。

うまくアメリカ沿岸までたどり着き、むこうで成功した人もいて、彼の姉に、マーマデコと呼ばれていたアメリカ人形を送ってきたことがあったそうである。

漁場に着くまではすることもないから、積み込んだ酒を飲みながら、そんな話をする。まあ、アメリカまでいかずとも、かつお節五本、米一斗、水一樽、あとは波まかせで寝ておいたら、朝鮮のどこぞに着くもんだ。

祖父はそんなことを聞かされてきたから、すべてにこだわりがなかった。板子一枚、下は地獄といわれるが、そんなことはあたりまえとして、漁に出た。ただ、信心深くげん担ぎをするのは、漁師みんな同じであった。大漁だと大盤振舞いをし、不漁だとまん直しにまた仲間を呼び、酒を飲んで散財した。

私が母の実家によくいつていた小学校のころは、もう祖父は岡にあがっていた。船溜ふねどまりの小屋の前で、よく網の繕いをしていた。昔は、麻か木綿網だったそうので、網干をしても朽ちやすく、よく破れた。今は、化繊網である。祖父は新聞は老眼鏡をかけて読んだが、漁網の繕いは、メガネなしでできると自慢していた。網の目が飛ぶこともなかった。

※

祖父は、私が大学を出て漁協に勤めはじめたころ、七十九歳でなくなった。その祖父から、千葉には縁続きの家が何軒かあると聞いていた。銚子と、市原である。ともに、北風姓を名乗っている。

明治の初め、旅稼ぎでまかせ網を曳いていて房総沖で遭難し、天津小湊あたりに漂着したというから、古い話である。今の、鴨川市だ。大漁だと、ふるさとから一族を呼び寄せたが、北風の一巻きといっても、本流ではない。

大学は東京だったが、一度訪ねてみるといわれながら、ただ遠縁というだけのもので、なんとなく気後れがし、とうとう機会を失ったまま帰郷した。

もう年賀状のやりとりだけで、互いの消息を伝え合う程度だったようだが、それでも市原の縁戚からは、祖父の葬儀に香典を送ってきた。市原の方は、もしかしたら、近い親戚かも知れない。

訪れる気になったのは、四街道に住む友人に会うことがあった時である。友人は阿波の宍喰町生まれで、同じ四国出身ということとでなんとなく親近感があり、話すようになった。

近くの日和佐海岸はウミガメの産卵地で、飲むと繰り返し聞かされたものだった。実家は土建業だったが、どことなく海の香りがする男だった。祖先は、咸臨丸に乗り込んだ塩飽水軍だといっていた。その友人を訪ねた時、控えてきた縁戚の住所を探した。小湊鐵道始発駅の五井から二つ目の海士有木の近くのようだ。友人に聞くと、小湊鐵道は、今では珍しいディーゼル自動車らしい。平屋の瀟洒な家だった。チャイムを押し、伊予から訪ねてきたことを話すと、驚いたような表情で、私の顔を見つめたまましばらく立ちつくしていた。居間に通された。今は独り暮らしだが、子供は東京にいるという。茶を淹れるのが面倒だからとい、一升瓶とコップを二つ持ってきた。

飲みながら、私の祖父とはまたいどこだといった。何人かの先祖の名前をあげたが、私には皆目わからなかった。市原あたりの沿岸埋め立ては、昭和三十年代からはじまったそうであるが、初代は天津小湊から、いずれ銚子街道をくだって来たモンだろうといった。

岡にあがってからも釣りが忘れられず、房総にも、よくでかけるといった。東京にいる息子は、葉のプロパーをやっていて、釣りにはまったく興味はないそうだ。

仕方がないから孫たちを連れ出して、養老川河口にできたオリジナルメーカー海づり公園によく出かける。三百メートルあまりの釣り桟橋があつて、釣れなくても孫たちを遊ばせるには、格好の場所だといった。私が、漁協に勤めているというと、この間はカレイダービーに出て、優勝したと嬉しそうに話した。

若いころからなりわいにしてきた漁の話は、尽きることがなかった。房総沖ではあまり網にかからないトビウオ漁に、八丈島まで手伝いにいったことがあるという。大島桜の咲くところで「春トビ」といつていたが、卵を抱いているトビウオを刺し網でとる話だ。私は、祖父から聞いたトビウオの話をした。私のふるさとでは、トビウオのことをアゴともいった。

それは面白い話だ。ぜひ泊まって続きを聞かせてくれというので、断りきれず泊まることにした。いかげん酔ってきたころ、いいものを見せるといって、彼は一度しか袖を通したことがないという、萬祝の半纏を取り出してきた。

古い杉箱に入ったもので、蓋の裏に、身丈五尺、袖丈二尺、衿

二尺五寸と書いてあつて、北風姓と記してある。

大きな男だったようだ。背には、源氏車に似た風車紋、裾には大漁文字の染め抜きと、青海波にカツオが躍っている。今は漁網が化繊に替わつたように、ふるさとの船主があつらえる大漁旗も化繊が多くなつたが、その萬祝は、天竺木綿に染めたものである。まだ、色あせておらず、大切に保存していたようだった。

羽織つてみると言われた。恐る恐る両肩に掛けると、回つて背中を見せるといわれた。潮灼けた老人が笑つた。あんたが着ると、長襦袢を着ているようにみえるといわれた。持つて帰れという。あんたの爺さんのお墓に被せてやれといった。

私が住む港町には、浜施餓鬼がある。秋の彼岸の最後の日、海で亡くなつた者や先祖供養をするための盆行事だが、今年一年殺生して獲つてきた魚の霊も慰める。それぞれの家から精霊船を浜に持ち寄るが、多くは、もと船大工だった老人に作つてもらふ。船尾の艫から舳先の水押しまで、一メートルは優にある。

家紋を入れた提灯、花飾り、帆には船名を書いた。祖父の持ち船は、神幸丸だった。どの家も、故人の好きだったものを供えるが、金を惜しまず張り込んだ。灯りのともされた舳い船は、何艘かの伝馬船に繋がれて、沖に向かつていく。沖合まで行くと、舳い綱が解かれる。夜の海に、灯が揺れながら、やがて彼方に見える。なくなる。

晩夏の深い闇に、花火があがつた。昨年は、しだれ花火だった。この立秋を過ぎると、海に入るなどいわれたものだ。土用波が寄せてくる。岸に、まだ淡い紅色の浜昼顔が咲いていた。風や波で

砂が流れると、浜昼顔の蔓も動いて、岸の近くにまで伸びて咲く。

翌朝の海は、何事もなかったかのように、風いだ海が広がつてきた。私が浜にたたずんでいると、母の妹が歩行車を押してやつてきた。そのころ叔母は、母と二つ違いで五十四になつていた。漁師に嫁いだが、寡婦になつてからは、ずっと八幡浜漁協にトロ箱を運んで働いてきた。

今のトロ箱は丈夫で軽い発泡スチロールだが、昔はこのあたり、檣材で作つた木箱だった。トロール船が港に接岸すると、水揚げした魚をすばやくトロ箱に入れて選別し、船の帰港順に競り市に出す。手鉤で引きずるにしても、重いものだと二〇キロはある。

叔母は足腰を悪くし、実家で厄介になつていく。この間は、母と一緒に泊まりがけで、島四国を巡つてきた。漁師の妻は若いころから講組織に入つて、夫が海に出ている間は、講仲間と島四国を巡り、無事を祈つて願掛けをした。

叔母も、萬祝を被せた墓に詣でたようだ。北側は小山になつてこのあたりの墓は、どの墓も海に向かつて建てられていた。

お返しをせにやあならん、といった。早くに亡くなつた叔母の夫は癩癩持ちで、一本釣りにこだわる人だったが、釣れた魚は、とりあえず魚を活かしておく「イケマ」に放り込む。

しかし、鯛狙いで船を出したつもりが、雑魚ばかりだと、帰りに全部逃がしてしまふ。変わりモンで通つていたが、ただ、律儀な人であつた。その律義さが、万事おまかな気性の多い浜漁師の間では、あだになることがあつた。

私は法事の引き物には普通の銘茶ではなく、何がよいか考

えてはいたが、なかなか思いつかなかった。叔母は、父さんがよ  
う食べとったモンがええじゃろう、という。

なら、アゴ焼きがいいということになった。祖父が、鹿児島沖  
で網を絞っていた時、トビウオが網の中で空を舞いはじめると、  
飛び込んだ話を思い出していた。祖父の好物だった。海に飛び込  
むのは、空を舞って逃げようとするトビウオを、網から逃がさな  
いためだというのは、市原の爺さんから教わるまで知らなかった。  
萬祝を被せた祖父の墓の写真と一緒に、焼いてから天日干しし  
た、アゴ焼きを送った。爺さんから、まだ張りのある塩辛い声で  
電話があった。息子の家にも、お裾分けしようだ。

あれから、もう半世紀近くが過ぎた。私がまだ漁協に勤めてい  
たころだったが、浜施餓鬼も、いつの間にか廃れてしまった。精  
霊船だろうと、今は流し放しは禁じられている。魚群探知機の時  
代、思わぬ大漁で萬祝を出す船主もいなくなった。

(了)